

平成28年度 第3回 三重県総合教育会議

- 1 日 時：平成28年10月4日（火） 14:30～16:00
- 2 場 所：三重県勤労者福祉会館 5階 職員研修センター第2教室
- 3 出席者：三重県知事、三重県教育委員会（4名） ※ 欠席：岩崎教育委員
三重県教育委員会特別顧問
事務局＜戦略企画部＞
部長、副部長兼ひとづくり政策総括監、戦略企画総務課長
＜教育委員会事務局＞
副教育長、次長(教職員担当)兼総括市町教育支援・人事監、
次長(学校教育担当)、次長(育成支援・社会教育担当)、
次長(研修担当)、教育総務課長、教育政策課長、
小中学校教育課長、学力向上推進プロジェクトチーム担当課長
ほか

4 質 疑

◆戦略企画部長

ただ今から平成28年度第3回三重県総合教育会議を開催します。
開催にあたりまして、鈴木知事にご挨拶をお願いします。

●鈴木知事

本日、今年度第3回の総合教育会議を開催いたしましたところ、委員の皆さんには、大変お忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

また、前田委員長をはじめ、三重県の教育行政に日頃からご尽力いただいていますこと、改めて感謝申し上げます。

本日の議題は「平成28年度全国学力・学習状況調査の結果の分析と今後の取組」です。

この総合教育会議、あるいは各教育委員会などにおいて、教育委員の皆さんや貝ノ瀬特別顧問に各学校や市町を訪問していただいて、学力向上について危機感を持って必死の気持ちでやっていかなければならないとだいぶおっしゃっていただいたおかげで、そしてなにより子どもたちが粘り強くがんばった、その結果として今回、調査開始以来初めて、小学校では国語B、算数Aで平均を上回り、中学校では数学Aで全国と並び、8教科中3教科が全国平均以上という結果になりました。

まだまだ学力調査の部分も、学習状況調査の部分も、児童・生徒・学校も、課題があるのは間違いありませんので、分析をし、今後の取組についてご指導賜りたいと思いますが、やはり年々積み重ねてきて、去年も一定の改善があり、また今年も更なる改善があったということで、子どもたちも、学校現場も、校長も、また親御さんたちも、「やればできる」という気持ちになってきていただいているのではないかと思います。

今年度から「三重の学力向上県民運動セカンドステージ」に入っていますし、

是非、こういう機運を更に広めて「やればできる」という達成感と次なる意欲に繋がるような形で進めていきたいと思っておりますので、委員の皆さんのご協力・ご指導を引き続きよろしくお願い申し上げます。

◆戦略企画部長

これより議事に入らせていただきます。

なお、本日は、岩崎委員は、所要によりご欠席です。

本日の会議は公開で行うことをご報告させていただきます。

議題について事務局から説明の後、意見交換を行いたいと思っております。

では「議題1 平成28年度全国学力・学習状況調査の結果の分析と今後の取組」について、事務局から資料の説明をします。

◆教育委員会事務局次長(学校教育担当)

資料1をご覧ください。

教科の関係、質問紙の関係、それと県民運動の関係という3つの構成となっております。

まず、平均正答率の平年の概況です。

「右上がりの矢印」が8教科のうち6教科で付いており、この6教科で全国との差が改善したということを表しています。

そのうち「◎」の付いている小学校の3教科については、過去最良の水準ということを表しています。

更に、そのうち「*」の付いている2教科については、全国平均を上回ったということ、小学校では平成19年の調査開始以来、初めてのことです。

また、中学校の数学Aについては、全国平均の水準に並んだところではあります。

続きまして、次ページの無解答率の状況についてご覧ください。

無解答率は「右下がりの矢印」がある方が良いということになり、8教科のうち6教科で全国との差が改善しています。

「◎」が付いているのは8教科のうち6教科で、過去最良の水準となっております。

「*」が付いているのは8教科のうち7教科で、全国より良好な水準ということを表しており、昨年度の改善傾向が今年度更にもう一步進みました。

続いて、質問紙の概況についてです。

まず「1 学校での組織的な取組」の概況ですが、昨年度は特に小学校で組織的な改善が進んだというのが特徴でした。今年度は、小学校の改善が更に進むとともに、中学校でも組織的な改善が進んだというのが特徴となっております。

一方で、例えば校長の見回りについて申せば「助言や励ましがしっかりできているか」ですとか、「振り返りが時間切れになっていないか」「ノート指導、宿題の出し方などにつながっているか」など、質的な部分を一層、留意していく必要があると考えています。

また、次期学習指導要領で一つの柱となる、主体的・協働的な学びに関わる指標について、三重県は全国同様、正答率との相関が非常に高く、三重県でも取組

は進んでいるのですが、全国平均よりはまだ下回っている状況です。

なお、「小学校訪問」について、組織的な取組、校長のリーダーシップを支援するということで小学校全校訪問を行ってきましたが、複数回訪問ができた学校の方が、改善幅が大きくなっている状況が見られます。

「(2) 全国学調等を活用した取組」は様々に進んでおり、例えば自校採点についても昨年度9割までできていたのが、今年度更に進んでいる状況です。

「(3) 宿題の出し方」について、質問紙はかなり細かくなっており、事前・事後のフォローの程度によって効果が違ってくる部分があるわけですが、全国に比べると相関が低くなっており、宿題の出し方に改善の余地があるのではないかと考えています。

「(4) 実践推進校の状況」について、少人数、あるいは学力アドバイザーによる助言などで、組織的に改善の取組を進めているところです。詳しくは14ページ図表1をご覧くださいと思いますが、小学校は「◎」ばかりとなっており、小学校を中心にほとんどの教科で大きく改善している状況です。

「(5) 日本語指導が必要な児童生徒が在籍する学校の状況」「(6) 就学援助を受けている児童生徒の在籍する学校の状況」の正答率については、15ページ図表2、16ページ図表3でプロットしています。一律に明確な相関は見られないものの、地域の特性や学校の実態により状況は異なり得ますので、例えば本県では困難校でそれだけがんばっているのだということも十分考えられます。今後も一層、個別の状況をきめ細かく見ていくことが重要だと考えています。なお、学校質問紙で分かる範囲ですが、正答率の高い学校では5ページに記載のような学習サポート等が行われているという傾向がありました。

今後の主な手立てについて、教育支援事務所を中心にきめ細かい支援を引き続きしっかり行ってまいります。今年度すでに1回目の訪問を終えている中学校についても全校訪問を重点的にやっていきます。

実践的ということで好評を得ている国の調査官を招へいしての研修会について、今までやれていなかった中学校国語分野でも追加して実施予定です。

また、横展開をしっかりしていくほか、リーディングスキル、これは教科書程度の説明文の日本語の意味が正確に読み取れるかということで、例えば全国学調でも問題文が長すぎて内容自体が読み取れていないのではないかとか、もっと言えば、人工知能に取って代わられないような能力を今後身に付けていく必要がある、という意味でも近時注目が高まっているところですので、こうした問題意識も持っていきたいと思っています。

続いて「2 家庭での過ごし方」についてです。

基本的な生活習慣については、チェックシートの実施率、フィードバック率ともに向上しており、小学校を中心に学力との一定の相関関係も出ています。

質問紙を見ると、スマホを含め全般的に改善は進みつつありますが、やはり特にスマホについての課題が大きく、所持率も高く、使っている時間も長い、そして学力との相関関係が顕著となっています。

なお、今年度から質問紙で、夜いつ寝ているかが加わりました。特徴の一つは、

三重の子どもは比較的早寝であること。もう一つは、学力との相関ですが、全国と同様の傾向が見られ、21時前に寝ているとか24時以降も起きているというような両極端の場合はあまりよろしくないのですが、そのうえで小学校であればむしろ早い方が良く、中学校では逆に23～24時ぐらいまで頑張っている方が良く、という状況となっています。

続いて「(2) 学習習慣」「(3) 読書習慣」についてです。

かねて特に課題として認識してきた3点、すなわち「学習時間が短いこと」、家庭学習の中で、宿題や予習はやっているものの「復習が弱いこと」、朝読などは盛んですが「自主的な読書に結び付いていないこと」という3点において、残念ながら全国平均にはなお及んでいないものの、今般、いずれも小学校では改善しています。一方で中学校では、いずれも悪化しており、対照的な状況となっています。

今後の手立ての例ですが、一つには貝ノ瀬特別顧問が座長を務める関係部局をあげて検討を進めている「家庭教育の充実に向けた応援戦略（仮称）」も骨太で考えていきつつ、個別のところではチェックシートについても、やった後のフィードバックを充実していくことですか、LINE対策を含めたネットの付き合い方に関する対応事例集ですとか、スクールソーシャルワーカーの一層の周知・活用を図るための事例集の作成、さらには、プラットフォームとして情報が集まりやすい学校現場において、児童虐待を発見するのに資するチェックポイントを作成してはどうか、といった問題意識を持っています。

読書の関係では、大人が見本を見せつつも、同世代などの子どもが主役になることを通じてモチベーションを高めてもらいたいという趣旨もあり、読書リーダーとして子ども司書の育成ですとか、高校では全国大会が行われているビブリオバトルを中学以下にも普及していければとも考えています。

続いて「3 地域との関わり」についてです。

地域行事への子どもの参加は引き続き高く、かつ、課題があった、地域や社会での出来事への関心についても、サミット効果などもあったかと思いますが、改善しています。

一方で、一歩踏み込んだ、ボランティアでの関わりとなると、子どもも大人も全国を下回っています。

続いて「(2) コミュニティ・スクール、学校支援地域本部」との関係では、17ページ図表4は「◎」「○」であれば全国との差が改善しているという意味でして、指定校・実施校では昨年度以上に相当程度健闘しているのではないかと考えています。

「(3) キャリア教育」については、地域人材を招へいした事業の実施ですとか、勉強していることが役立つと思うかという観点などでは、全国を上回っており、学力との相関も出ています。ただ残念なことに、将来の夢という指標には必ずしも結び付いていないという点は課題となっています。

手立ての一つとして、先進県である山口県を視察させていただきました。実質的に全校でコミュニティ・スクール化も進んでいるなど、社会教育との各種連携

が大変進んでおり、三重流にカスタマイズが必要な部分も当然あるかとは思いますが、例えば中学校で教科を超えて授業を研究し合うことですか、地域や子どもの声を授業改善に積極的に活かすことなど、様々な学びがありましたので、活用を検討していきたいと思っています。

続いて「4 自尊感情・自己肯定感」の関係です。

全般的に、大人側の努力が子ども側の受け止めにも届いてきている、という傾向が見て取れるのではないかと考えています。

中でも2つ、児童生徒質問紙の新しい質問項目である「先生は良いところを認めてくれているか」「間違えたところ、理解していないところを分かるまで教えてくれるか」という指標が全国平均を上回っている点は、注目すべき大事なポイントではないかと考えています。

今後とも、幅広い大人の関わりですとか、学力向上そのものを含め、幅広くしっかり取り組んでいくことが重要であると考えています。

続いて18ページ、質問紙を、県民運動の観点から、大きく関連する情報をまとめてみたものです。

経年の状況が見える化、早見表化したものであり、県民運動開始以前の直近の悉皆調査である平成21年度まで遡るわけですが、そうした時期との比較と、直近との比較等を行っています。

絶対値として三重県が自己成長していれば「+」、全国との差が相対的に改善していれば「A」という要領でまとめていますので、適宜ご参照いただければと存じます。

続いて22ページ、現在の中学3年生は全国学調を初めて二度悉皆で受けた世代ということになりますので、その点に注目し、小学校在籍時と中学校在籍時のものを、同じような指標を活用しつつ比較しています。

ただ、例えば自己肯定感は長ずるにつれて下がる傾向が一般的にあるなど、単純に比較しにくい側面もありますので、特に全国差の部分、AかCか辺りは大いにヒントになるのではないかと考えています。

例えば「目当てを提示されているか」は「A」「○」となっているので、小学校の時よりも提示されていると受け止めている、ということを表しています。

一方で、スマホですとか、自主的な読書は「C」ということで、小学校の時よりも状況が悪化しているということなどを表しています。

そうした現在の中学3年生世代ですが、正答率・無解答率のいずれについても、大きく見れば全教科で全国との差に改善が見られるという状況です。

続いて、資料2をご覧ください。

結果公表に対する市町教育委員会の意向状況です。

全市町で、何らかの形で教科、児童生徒質問紙、学校質問紙のいずれについても公表予定です。

もう少し細かく見ますと、県民運動の趣旨から家庭・地域と連携、協力するうえでも、前提として情報共有が大切だということで、例えば教科について、数値を含めた客観的な方法での公表にも昨年度の12市町から15市町に増加予定となっ

ています。

学校現場の課題や努力を知っていただくうえでも大変意義のある学校質問紙の共有についても、昨年度の段階で8割まで進んできていましたが、今年度は基本的にすべての学校で公表の方向と聞いています。

なお、今後、教育委員の方々にも入っていただきながら、市町教育委員会とのブロック別での情報交換等の機会もありますので、地域別の傾向なども分析を進めていきたいと考えています。

続いて資料3をご覧ください。

以上の調査結果、概況を踏まえて、三重の学力向上県民運動セカンドステージにおいて、学校での組織的な取組を深めたり、家庭・地域での取組を広げたり、大人が関わっていくうえで、今後具体的にどのような点に留意しながら、取り組んでいくべきかについてご意見をいただければ幸いです。

◆戦略企画部長

本日、貝ノ瀬特別顧問から資料が提出されていますので、ご説明いただきたいと思えます。

◇教育委員会特別顧問

「教育効果の高い学校での取組み」というプリントをご覧ください。

少し古いのですが、しかし現在でも通用する汎用性の高い内容だと思えましたので、お示ししました。

お茶の水女子大学の耳塚教授のグループが取り組んだものですが、私たちは全国学力・学習状況調査等の結果を分析する場合、得てして上位県での取組とか、上位校、上位のグループ等に学ぶことが多いのですが、一方で、厳しい条件、環境の中でも成果を出しているというところに注目し、分析して参考にすることも必要なのではないかという意味で、経済的に厳しい状況にある子どもたちのいる学校で相当の成果を上げているところについて分析したものです。結果として、三重で取り組んだものとほとんど共通する取組をやっているということで、私どもの取組がしっかりしたものだということの論証になると思えます。具体的には、表現力・課題探求力の向上ということで、朝読書とか、将来の仕事とか夢についてしっかりと考えさせたり、議論をさせたり、ということです。

それから、教員が、授業の中で、子どもたちの発表や意見を言うときに待てないことが多く、すぐ発言しないと、つい「もういいから」「じゃ、次」などと言ったりする。そして、そういうことが結局のところ、子どもたち自身のやる気とか自己肯定感が低くなっていくことにつながるということで、発言や活動の時間をしっかり確保しながら授業を展開する、言語活動を重視する必要がある。

各学校でもしっかりと取り組んでいただくことをお願いしており、目当てをしっかりと持ち、最後に振り返り活動を取り入れる、また、ノートの取り方について方法も含めて指導するとか、家庭学習の課題の与え方でも、ただ宿題を多く出せばよし、ということではなく、どのように自学自習をするのかという方法も含めて指導がなされていないと成果が上がらないと思えます。

学校限りではなく、保護者等に働きかけて、家庭、そして地域も同じベクトルでもって共通の子ども像を目指して教育活動を行っていく、ということは、長い目で見ると大きな力になってくると思います。

それから、よく言われていますが、習熟度別の少人数指導とか、インテューチングとか、補充的な学習指導も効果があるほか、地域の人材を活用した授業も効果があると思います。やはり本物の話を聞くことが子どもたちに大きなインパクトを与えて、やる気にもつながっていくと思います。

これらは三重も取り組んでいることですので、余分な資料かも知れませんが、観点として、厳しい状況の中で成果を上げているということについても思い出す必要があると思います。

◆戦略企画部長

ありがとうございました。それでは、ここから意見交換に入りたいと思います。

○前田教育委員長

今日はすごくスッキリした気持ち、嬉しい気持ち、早くこの日が来ないかと、そんな思いでした。本題に入る前に少し家庭の中で起きたエピソード、これも一つの県民の声かなというような事例がありましたので、私事ですが紹介します。

全国学調の発表当日の夕食時、NHKのニュースで結果が良かったことが放映されると、小学生を含む2人の子を持つ息子の嫁が開口一番「お義父さんやったじゃない、すごいじゃない」と。「いや、私は何もしてない、教育長がしたことだ」と言ったのだが「だけど、やっぱりすごいじゃない」と言われた。極めてプライベートなエピソードですが、就学児を持つ方々はそう感じる人が多いのだろうと思いました。

こうなる予感が私にはありました。

教育委員をさせていただいて3年半になるが、私が着任した頃、学力の向上が三重県の教育課題の1番目でした。当時、市町の教育委員会や学校の危機感について、ものすごく温度差がありました。県の教育委員会は市町の教育委員会の上位に位置するのだと思っていましたが、対等で独立した存在であると教えられ、驚きました。そういう組織のあり方というのは、私が生きてきた世界ではなかったものでした。独立した組織で、温度差があることを、県全体でどう進めるのか、不安に思いました。しかし、県教育委員会が強い意志を持って、何をしたいのか、何を望んでいるのかを発信すべきであると思っていたので、市町との協議の中でも微力ですが発信してきました。その後ろ盾となったのが、どこかの小学校の子どもが「そんなこと言ったって、僕らアホやもん」と発言したという事例でした。とてもリアリティーがあり、そういう思いのまま子どもたちを進級、進学させていたら、教育の役割を果たしていないことになると思いました。自尊意識、自己肯定感を高めるのが、教員や親もひっくるめた、私たち大人の役割であると考えました。

学習の結果の数字が上か下か、それも大事なことはあるが、そうした思いを子どもに持たせられないと、教育の役割は果たせていないと思いました。

自分はいろんなところで発信をしてきて、そこに知事も強烈的な発信をしてくださいました。例えば先進優良県の視察とか議会でのメッセージなど、いろんな場面で発信していただけた。そのことは、温度差を埋める、方向性を収斂させていくということで、すごく大きな効果があったと思っています。

それが去年感じたことです。

今年は、去年からの分析がきちんとなされていたと思います。今日の資料にある分析も、さすがだなと思いながら聞かせてもらいました。何が足りていて何が足りないか、それを明確にするための分析ですから。

確か去年は専門機関に依頼して費用もかけて分析したのだったと思います。そのことに私は賛成です。やはりそういうところで有効に実施することは良いことで、その結果がここに表れているのではないかと思います。

これまでやってきたことは正しかったと思います。これからは、足元を見ずに前ばかりを見過ぎることのないよう、今一度足元を見ることが大切です。三重県は今ちょうどそういうところに来ているのだと思います。

例えば「授業の目当て、振り返りをする」、言葉にするとこれだけのことですが、目当てを子どもに伝える、そのことの質が問われているのだと思います。目当てを設定している、振り返りをしている、というデータは出ているので、今度はその中身だと思っています。

貝ノ瀬特別顧問が言われたように、いたずらに宿題ばかり、量を出してもいけないと思います。家庭環境も生活環境も違うわけなので、個々に合った指導を教員ができるかどうかだと思います。今度は教員の力量が問われてくるようになると思います。

より高みに上っていくために、老婆心ながら申し上げました。

それから、読書習慣について。

数学・算数・国語・社会・理科、全ての教科に読書はついてまとうと思います。読書習慣をつけるために三重県でもいろんな取組をやっていると思うのですが、ちょっと弱いと思います。もっと強く、家庭・保護者や地域に対し、やった方がいい、やるべきだと思っています。

私のささやかな経験ですが、本を読むこと、もっと言うと活字を読むことは、強制されるとこれほど苦痛なものはないと思います。自ら本を読みたいと思わせたら、図書館の活用などいろんなことを能動的にするはずですが、結果的にスマホなどへの時間も少なくなっていくと思います。この面白さ、喜びをどう伝えるかが問題ですが。これは学校でも、友だちでも、家庭でも、特に家庭の役割は結構大きいだろうと思うのですが、伝えていって本が好きな子どもたちを育てると、もっともっと良くなっていくと思っています。

自尊感情、自己肯定感を高めるためにも、ほめることが大切です。相手をよく知らない、ほめる対象の子のことをよく観察していない、ほめることができないと思います。

私もこれからもっと教育委員会事務局の皆さんをほめてあげたい、現場の教員も、もちろん頑張った子どもたちもほめてあげたい、そんな嬉しい気持ちで参加

しています。

○森脇教育委員

私なりに数値を分析してみたことも含めて3点お話をさせていただきます。

一点目、平成28年は、歴史的な年になる、歴史に残ると思います。

というのは、去年から山は動きつつあったのですが、去年の新聞の見出しは「全ての教科にわたって平均以下」というものでした。その前の年は、これはある地方新聞ですが「取り残された三重県」みたいな見出しがあったことを覚えています。そして今年は、3つの教科において全国平均を上回った、これはやはり歴史的な年になると思います。

小学校においては、ほぼ全国平均に並んだというふうに思いますし、「離陸」という言葉を使うと、去年は「離陸しつつある」と申しましたが、今年はもうはっきりと「離陸」と言っていきたいと思います。おそらく、組織的な取組が進んでいる県では離陸ができて、それを維持することができています。沖縄とか高知などを見てもそうだと思うのですが、組織的な取組がずっと続けば、成績は維持され、あるいは右肩上がりにもっていくこともできるだろうと思います。

学校が動き、教員の意識が変わることで、授業のスタイル、というより私はミニマムスタンダードだと思いますが、目当て、振り返りなども浸透していき、きちんと力の付く授業ができるようになってきていると思います。

中学校はなかなかその成果が出ていませんが、平成25年と比べると伸びており、中学校も授業は変わりつつあると思います。目当て、振り返りが浸透しているということもありますし、国語・数学好きの子どもが増えているのです。これは今までとはちょっと違う傾向です。そして授業を何とかしたいというところに、中学校の教員も目が向いてきている。これが結果として表れるには、この平成26、27年度の小学校6年生が中3になったとき、どれくらい伸びてくるかに、すごく期待が持てると思います。

ただし、その児童生徒の学習習慣については課題もあるということが先ほどの報告にもありましたように、特に中学生の学習時間が少ない。スマホを使う時間が多くて学習時間が少ないというのは、やはり両者がバッティングしているということだろうと思いますし、それを何とかするための、ある種の運動とか、そういうことが必要かと思います。学習時間というのは「学力の基礎体力」だと思っており、やはりこれが伸びてこない、学力は安定しないんじゃないかと思っています。

2点目は、学力競争の傾向が出てきていると文科省から指摘があり、今年は小数点以下は公表しないとしました。即効性のある取組はなかなかなくて、三重県の場合「いろんな組織がいろんなベクトルを向いている」というところが特徴で、説得と納得と参加という形でじんわりと共通点、一致点を見出してきた結果が、特に小学校の上昇につながっている。ある意味ではゆっくりと漢方薬みたいな取組をずっとやってきた、ということで副作用も少ないのではないかと思っています。

それからもう一つは、手段が目的化することに対する文科省の心配だと思いま

す。つまり、学力を上げることそのものが、学力を育てることの結果、結果として学力が上がるということなので、それはある種の目的のための手段ですが、学力調査についてもそれが目的化してしまっていると。8教科中3教科というのはちょうどいい機会なので、そろそろ「三重県の子どもにとっての学力はどうあるべきか」という議論を始めたらどうかと思います。「みえスタディ・チェック」がすごく改善されてきている様子も報告されていますが、三重県の子どもにとって、例えば教育ビジョンの1番最初に「自立と共生」と書いてあるが、その「共生」のための学力って一体何なんだ、ということを考えて、「三重県版の学力調査」みたいなものができるような方向に持っていったらどうかと思います。

例えば、お互い学び合って、一つのことを作り上げていくことなどはペーパーテストがなく、全国各地では測れないが、三重県では測っていますよ、となれば理想的だと思っています。教育心理の人は「何でも測れる」と言う。そういうことも、もし測ろうと思ったら測れるかもしれないと、夢のようなことですが、考えています。だから学力の緊急対策チームというのはもうやめて、もう「緊急対策」の時期は終えて、次の課題に向けて舵を切ってもいいのではないかと思います。

そういうことができれば、手段が目的化するという話と真っ向から対案を示すことになるのではないかと、「三重県は三重県の学力をこう考えていますよ」ということが示せれば、ドンと対案を示せるのではないかと思います。

3点目は、市町の状況によって随分状況が違い、これまで全然結果が出なかったところで奇跡を起こしているところがあります。具体的な名前は言わないが、そういうところをぜひ取り上げてほめるべきだと思います。何がどう変わったからそうなったのか、そして取組をどう進めたかについて紹介するなど、いろんな形で発信することによって評価をしてあげたいと思います。

○柏木教育委員

私は結果を聞いて嬉しかった点が2つあります。

一つは児童生徒質問紙の中で、総合的な学習の時間で学習したことがこれからの社会に出たときに役立つという結果が高かったことは大きい。最初は学校の人たちが「学調だけが学力じゃない」と言っていたのが、学調も頑張った結果、子どもたちの中に「社会に役立つ」と感じられるようになったことを、とても良いことだと思いました。

次に嬉しかったのは、先生が授業やテストで間違えたところ、理解していないところについてわかるまで教えてくれるという結果が高かったこと。教員が頑張ってきて、子どもと一緒に課題をクリアしてきたということが、ありありと見える数字だと感じ、本当に教員が頑張っていることを痛感しました。

そして、次に頑張るのはやはり家庭かと考えます。しかし、家庭、保護者と言っても、子育ては初めての人たちばかりで、教員は毎年いろんな子どもたちを見ているのですが、保護者にとっては自分の子どもを育てるのが初めてで、1歳、3歳、5歳、小学生、中学、高校と、初めてのことばかりなので、今度は学校に対して

「親育て」を頑張っていたきたいと、凶々しくも思います。習熟度別というものがありますが、保護者に対して習熟度別というのは難しいと思いますが、やはり子どもの方を向いていない保護者には個人面談をすとか、家庭訪問を繰り返すとか、児童生徒質問紙を保護者と共有して、親としてどういう点が自分の子どもに対してやっていけるか、といった具合に、親を育てていってもらえればと思います。

私は本で読む活字の小説が結構好きです。でも、昔を思い起こすと、長編物よりも短編から入っていたと思います。家で10分間読書をする子どもが少ないということなので、10分で読める短編小説、毎回楽しいものを紙に印刷して、冒険物、出世物、社会物など毎日違うジャンルのものを子どもたちに提示していくことが良いと思います。

これからは家庭学習にも力を入れて取り組んでいくとして、応援戦略を策定するという事なので、私はこれにすごく期待しています。やっぱり子どもも初めての1年生、親も初めての1年生なので、なかなかわからない点が多いと思うし、横の繋がりも希薄になっている中、自分の子どもしか見ていない状態だと、何が良いか分からなくなります。本当に期待していますので、戦略策定を頑張ってください、よろしくお願いします。

◇教育委員会特別顧問

正に今年の結果は、三重県の子どもたちの力が飛躍的に伸びて、ちょうどエポックになっているところだと思います。

これはやはり、総合的な県の取組が各市町に及び、そして各学校に及び、そして教員、子どもたちにも浸透してきたのだと思いますが、その教員の力というのも相当に大きかったと思います。ですので、機会あるごとに励まし、ほめてあげることが大事じゃないかと思います。大人でも、お世辞だと分かっているけど、ほめられると嬉しいものです。やはり何と言っても第一線の教員が頑張ってくれないとどうしようもなく、校長だけが頑張っても、教育長だけ頑張ってもダメなものです。特に今、極めて困難な状況の中で仕事をしているということですので、教員の意識改革が大事で、そのためには更に励まして頑張ってもらうことが必要だと思います。

そういう面では、非認知能力、自尊感情・自己肯定感が典型的ですが、やはりこのことは三重の誇りとしていいのではないかと思います。教員の方々との関係の中で子どもたちが自己肯定感をぐんぐん伸ばしているということは、特筆すべきことだと思います。これもエンジンになりますので、しっかりと安定してくれば、必ずや学習に転化していくと信じています。そこをやってもらうのもやはり教委の方々ですので、教員をしっかりと力づけていくことも大事だと思います。

市町のいろんな取組についても情報はキャッチしていると思いますし、今までの蓄積もあると思いますが、やはりいろんな面で際立っているところ、厳しい条件の中で頑張っているところなどの取組例を他の市町にも紹介してやることも、県として大事な仕事になると思います。東員町が随分努力されていると大手教育

業界の方から聞いていますので、そういった具体的な取組などについても、他のところで参考になるものがあれば、PRしてもいいのではないかと考えています。

朝日新聞の天声人語に、三重県の子どものことが取り上げられたことがあり、私もこれを見て大変感動したのですが、子どもたち一人一人の興味・関心を大事にして伸ばしていくことは、結局は自己肯定感、自尊感情、そして学力向上にもつながっていくわけです。学力の調査を狭い意味で捉える傾向があるというご指摘もありますが、本質的にはそういうものではなく、多様な尺度で子どもを見ていくことが大事で、そうしていただくことを教員に望みます。

例えば福井県とか秋田県とかだけに良い教員が集まり、良い子どもが集まるなんてことは絶対ないわけです。偏在しているわけではありませんので。わが県はまだまだ伸びしろがあると思いますので、これからもいろいろ改善の余地もあると思いますが、一步一步、前へ進んでいくための励みになる、非常に良い年になったと思っています。取組に自信をもって更に進めていくことが大事だと思いました。

○山口教育長

本当に皆さんが一所懸命やっていたいただいた結果だと思っています。

振り返ってみますと、一斉テストは学力偏重だと言われる中、よその県は昭和の頃からやっており、三重県は平成26年からやり始め、今では土曜授業も全国で一番やっているとされています。

非常に抵抗は大きかったが、学調の公表もどんどん増えてきて、生徒質問紙だけではなく学校質問紙も100%になったということは「全ては子どもたちのために」ということで現場の教員が頑張ってくれ、市町教育委員会の方々にもご協力いただいたと思っています。

教育行政の中で、学力向上のためにこれまで色々予算を付けていただいた点について、どうやってこれを活用していくかという観点で述べたいと思います。

まず、主幹教諭とか指導教諭を活用する必要があるということが一点目です。せっかく指導教諭という登用試験をやっていますので、その方々が活躍する場をどうやって見つけるかということです。

小学校が全般的に伸びたというのは、学級担任制の良いところが出たと思っています。中学校の場合は、国語と数学の教員以外は学調に関係ないと思っている節があるようで、私自身にも現場からそうした声が聞こえるので、やはり中学校全体で、教科を離れて横断的に、国語、数学に加えて社会も理科も一緒になって取り組む必要があると考えます。言語活動はすべての教科で大事にされなければならない、それを特徴的にやっているのが国語であり数学であると思いますので、中学校にどうやってアプローチしていくかが大切だと思っています。

目当てと振り返りで、特に振り返りについて生徒と教員との間の乖離が大きく、20ポイントぐらいあるが、授業の終わりに「皆さん、目を閉じてください。今日の授業でやったことが分かった人は手を挙げてください」と、これだけでいい。いちいち紙を配って調査しなくてもいい。今日はたくさん手が上がったな、とい

うことが分かれば、教員は「今日はいいい授業だったのだな」と分かる。調査をしてみると、紙で配って、一つ一つ確かめて、となるが、そんなことはしなくていい。だから私は、家庭学習でも、チェックシートにフィードバックについて質問項目を工夫したらどうかと考えます。

例えば、家庭学習は1時間やりましょうということを必修の項目にして、後は早寝早起きとか家の手伝いをするとか。家庭学習を何とか1時間はさせようとするなら、県教育委員会が市町教育委員会や学校と組んで、チェックシートを工夫していったらいいと考えています。

緊急対策チームはテイクオフして上昇飛行へ入ったからもういいのではないかと、そしてアクティブラーニングだとか新しい学習指導要領への準備をしなければいけないのではないかと、とも思いますが、一方で前田委員長が言われたように、もう一度足元を見るということも大事だと思います。

できれば半分以上の教科で全国平均を上回る中、並行してそうしたことをやっていきたいという思いがあります。やはりここは凡事徹底で、今までやってきたことでやれなかったことを、教員たちと一緒にしてもう少ししっかりとやりたいという思い、メッセージを出したほうがいいのではないかなと思います。今回2教科上がったから、これで転がり出したから大丈夫というほど甘くはないのではないかと思います。ほめることは大事ですので、毎月発行している「三重の学-Viva!! (まなびば)」という学力向上通信で、優秀な取組の学校を紹介したり、あるいは学調の前の発表会などで、例えば伊賀市立柘植小学校のように、それぞれ家庭環境が良くない、あるいは経済的に困難な家庭、要就学支援が多いところの学校のサクセスストーリーを発表したり、ということはこれからもやっていきますので、優秀な学校とか優秀な取組を、これからもぜひ広げていきたいと思っています。

もう一つ言うと、できれば尖った人間も育てていきたいと思っており、先ほど貝ノ瀬特別顧問が津市立橋北中学校の西川君の話（朝日新聞の天声人語）をされましたが、伊勢高校の矢口君というセミの研究している子がこれまた非常に面白くて、そういう子どもたちを育てていけるような土壌は、一人ひとりの子どもをしっかりと学校が見ているということになりますので、授業改善で目当て、振り返りなども、結局は一人ひとりの子どもを見ていることになると思います。そうでないと、教員は自分の授業改善に繋がらないと思いますので、その辺りについては今後、小中の校長たちや市町の教育長たちと話をする中で、もう少し理解をいただければと思っています。

家庭と地域については、家庭環境が十分ではない子どもたちにどうやってアクセスしていくか、できれば補充学習をしっかりとやる、柘植小学校のような「分かるまで残す」などをやっていくこともひとつの手だと思っています。

読書については、今回のビブリオバトルの東海大会で3位まで三重県の子どもたちでしたので、そうした活動を小中学校でも取り組んでいけないか、これから考えていきたいと思っています。

●鈴木知事

それぞれにおほめもいただき、また、課題、今後の展望、注意することも言っていたきました。

自分なりに、今回の改善につながったのではと思っている要素について5つほど申し上げたいと思います。

1つ目は「見える化」したということです。公表したり、このように分析したり、成果を「見える化」したということ。

2つ目は、ファクトベースで「己を知る」ということをやったことです。最近、徳川家康の伊賀越えの小説を読んだのですが、家康の師匠たる太原雪斎（たいげん・せっさい）は、家康に対し常に「己を知れ」と言ったとされています。自分の今の立ち位置の現状はどうなっているのかをしっかりと見極めることで、戦においてどういう戦術を取ればいいのか、どういうふうに生きていけばいいのかということが分かるとされています。

3つ目は「仕組みにした」ということです。俗人的な、学校の教員の気合やパワー、根性、経験とかではなく、「仕組みでやった」のはやはりよかったということ。

4つ目は「取組に優先順位を付けて絞り込んだ」ということだと思います。あれもこれもととしていたら、おそらく訳が分からなくなったと思うので。

5つ目は「手間隙かけた」ということだと思います。人対人のことなので、やはり手間隙をかけることは、非常に大きいと思います。教育委員会のメンバーが全ての学校を訪問してくれたり、今年度からも教育支援事務所を置いて、手間隙かけてコミュニケーションをとったり、そして教員も分かるまで教えるというような形で手間隙かけてくれた。

こうした「見える化」「己を知る」「仕組み」「優先順位」「手間隙」というのが及びにくかったのが家庭だと思っています。家庭の状況を「見える化」するのは難しいし、家庭に「ファクトベースで己を知ってくれ」というのも難しいし、家庭のことを「仕組みにする」のも難しいし、「取組に優先順位を付ける」のも難しい、「手間隙かける」のも難しいと思います。しかし、この5つの要素は必ず効果があると思いますので、これから家庭に協力いただく時に、この要素をどう組み込んでいくか、要素をベースとした取組をどう考えるかが、すごく重要だと思っています。

今回よく頑張ってくれたところなどについては、しっかり発信していきたいと思っています。それは、「三重の学-Viva!!（まなびば）」による発信で、内部の人間がヒントを得るということだけではない。例えば、大隅先生がノーベル賞を取ったら、どこのメディアも取り上げてくれる。別に、三重県庁や三重県教育委員会が発信しなくても、絶対取り上げてくれる。でも、ある学校でこんなトライをしたということを伝えていくのは、我々しか出来ない。

昨日、ある地方新聞社の130周年があり、社長が「世界一の地方紙になる」と言っていました。「どこでも取り上げるニュースではなく、地に足の着いた、その地で頑張っているヒーロー、ヒロインたちのストーリーを、しっかり伝えてい

く」と言っていました。

そうした発信をしたことで「ここなら視察に行ってみようか」と、県外の人たちが視察に来たら、教員もきっと嬉しいと思います。プライドを持つようになって頑張ってくれるはずです。知事さえ、視察に行ったら喜んでもらえるのに。

家庭の、保護者のみなさんにも協力してもらうためにも、例えばメディアなどを通した声で知ってもらうことで「やはり頑張っていたのだ」と思ってもらえると思います。内部に対する発信だけではなく、外向きにも、自分たちしか伝えられないことを粘り強く発信し、みんなが嬉しくなるような、誇りに思えるような、「自分たちのやり方は間違っていなかったのだ」と思ってもらえるような、そうした動機付けで、次なる意欲を生み出していければと思います。

次への課題、児童生徒と学校とで乖離があるということについては、乖離を埋める努力をしなければならないと思っています。

自分は小学生の時はまったく本を読まなかったけど、なぜ本を読むようになったのか考えてみると、理由の一つは、短い小説を、星新一を読むようになって本が好きになった。もう一つの理由は、友だちが本を読んでいたということが大きかった。友だちが本を読んでいると、自分も本を読まないで、本を読んでもみよかな、という気持ちになった。

例えば、本をたくさん読んでいる子を「本博士」などと呼んであげることで、子どもたちの横のつながりの中で、本を読むのは良いことだと思ってもらう、そんな仕掛け、仕組みが大事かと思っています。大人が「本を読みなさい」などと押さえ付けるような読書習慣ではなく、互いに横につながって、本を読みたくなるような。

中学生の時に戦国武将の本を読み始めたのは、最初、友だちが読んでいて「何か面白そうだから読んでみよう」と思ったから。最初の一步をどう踏み出してもらおうかということも大事だと思いました。

○前田教育委員長

スマホと学習時間、学力の相関関係は、はっきりデータが出ているので、もっと訴えた方が良い。

スマホの時間をどうコントロールできるかは、家庭、親、保護者しかないと思います。教員が教室でいくら言っても、家庭の中まで指導に行くわけにはいきませんので。きちんとしたデータが出ている以上は、もっと強く訴えた方が良く思う。

では、保護者に強く訴えるにはどういう方法があるかというところ、県教育委員会は家庭、生徒に直結していないため、市町教育委員会、小学校、中学校と、現場に近ければ近いほど発信力は減衰せずに届くと思います。

全国学調の上位県、ずっとだいたい似たような順になっているが、どこの県がどういう手法をやっているかということは、情報が行き渡っていてオーソライズされていると思うが、特殊なことはそうはないだろう。また、そこに学ぶ子どもたちの質が、秋田の子が、福井の子が特別高いとは思っていない。三重県の子が

低いとは思ってない。子どもというのは等しく能力を持っている。では要因は何か。

あとはやり方の問題、質の問題と自問自答し、納得がきました。

例えば、授業の振り返り、目当てはやっているとされているが、問題は質である。子どもにそれがちゃんと届いているか、教員の側の「自分はやっている」と言うためにやっているのか、子どもたちのためにやっているのか。

きちんとした質のところは上位県となっているのではないかと思う。そのことは結果が物語っている。

当事者の方々は、これを契機に自信をつけていただきたい。

子どもたちの能力は学調の結果だけではないという声も直接耳にしましたが、3年前は言えなかった、それはあの時点では言うべきことではなかったと思っている。今、このポジションになったから、子どもはもっと可能性をいっぱい秘めた総合的なものであると、学力ばかりいたずら追いかけるものではないと、今だから言える。上位県が言うなら分かるが、40何番目の県がそんなこと言ったところで、何も訴求力、説得力がないと思います。だけどそれは当然のことである。学調の結果ばかり追いかけてもいけません。

それともう一つ、学力は一朝一夕では上がりません。少しやったから上がるというものではないと思います。ずっと積み重ねたものが実っていくのが学力だと思う。体力は違う。体力はひと月で上がると思っています。

そんなことも、今だからやれる、この流れの中でやれる、そういうタイミングに来たのではないかと、やるチャンスだと思います。

◇教育委員会特別顧問

繰り返しになりますが、今までの取組を更に質的に強化していくことに尽きると思います。具体的に申し上げますと、義務教育の段階では、小と中が一貫して、接続して連携を深め、15歳の時にどういう子を育てるか、ということについて小中一貫教育とか小中連携をもっと強化することで、継続的に、確かな学力の向上に繋がっていくと思いますので、そうした啓発もこれから必要だと思います。同時に、地域と共にある学校づくり、これは小中、高校も特別支援学校もそうですが、地域・家庭と学校、この三者が一緒になってより良い子どもを育てていく、子どもたちの幸せを実現していく、そういう仕組みもこれからは必要だと思います。

そして、これはもっと強調していいのではないかと思います。学力調査は、偏った学力、というか知識・理解だけを問うていると、いまだにそう誤解している人がいる。A問題は確かに知識・理解ですが、B問題はいわゆる活用能力、これがもう大人が取り組んでも頭を悩ませるような問題で、本当に思考力・判断力などが問われる中身の出題ですので、単に狭い学力の調査をしているのではないということをもっと理解してもらう必要があるのではないかと思います。

市町の、特に教育長あたりは、いまだにそう思っている方もいらっしゃいますので、今はそうではなくて、本当に幅広く力を調査しているということを理解し

てもらふことも必要だと思っています。これは私どもの努力不足ということもありますので、今後とも努力したいと思っています。

●鈴木知事

先ほど言い忘れたことで、5つの要素と並び立たないのですが、専門機関を使った分析ができたので分析のスピードが上がった。早く分析を終えたので、早く対策に取り組めるようになった。現場の皆さんの頑張りによって、分析が早くできて改善の期間がたくさんとれたということも、今回の非常に重要な要素だったと思います。自校採点するところも増えてきましたが、分析の時間をなるべく短縮して、そして改善にかける時間をなるべく長くするという基本思想はすごく大事なことだと思うので、引き続きやっていくべきだと思っています。

学力学習状況調査と直接は関係しませんが、今回のサミットに関連して、ジュニアサミットや国際地学オリンピック、高校生サミットなどを開催し、考えて主張する力みたいなのが、他国の子たちに押されてしまい、主に高校生たちが「もっとそういうことを頑張らないと」とどうやら思っているそうなので、そういう思いが、より低年齢にも影響を与えていくといいと思っています。そういうことが教員同士でも伝わっていったりして、自分で考えて主張するということが、若い世代においても広まっていくいいと思いました。

○前田教育委員長

この前、南伊勢高校を学校訪問したとき、発表してくれた生徒が東南アジアに留学した子で、すごく自信を持って喋っていた。

ああいう子たちが、周り、あるいは後輩に伝えてくれると、自分の目線と同じような子たちがやっているということで、上から言われるより、伝播していくのだと思います。

○山口教育長

今年、留学した子は、いわゆる進学校における研修ではなく、工業高校の子が行くとか、小規模校で英語もおぼつかないが、まず現地へ行ってみるというチャレンジな子どもが出てきた。その背中を押す雰囲気为学校現場にも芽生えてきたと思います。

ジュニアサミットや国際地学オリンピック、高校生サミットなど、いろんなことで海外の人たちと触れ合うことによって、「自分もチャレンジしなければダメだ」という思いができてきたことは、今回のサミットのレガシーだと思っており、これを確かなものにするのが、子どもたちが夢や希望を実現する一歩になると思っていますので、中学校とも連携しながらしっかりとやらないとダメだと、南伊勢町の町長や教育長には言っている。小規模だから、全部の生徒を海外研修に連れてくことだってできるのではと。中高で英語に特色を特化させ、そういう人材育成することも可能ではと。本当にサミットは非常に良い機会だったと改めて思っています。

●鈴木知事

今日この後、高雄市という台湾で2番目に大きい市の教育局の局長と面談する。中高の校長も20人ぐらい来て。教育旅行で台湾から日本に来てもらって三重県の中学生や高校生と交流をしてもらう、そういう誘致を今やっており、それで来てくれるのですが。実際に向こうに行ってみるのもそうだが、来てもらって台湾の生徒たちといろいろ交流したりするとまた、いろんな意欲とか達成感とか「なんか負けたくない」とか、そういう気持ちも出てくるのではないかと思う。国際交流の一環ですが、そういうことにも積極的に取り組んでいきたいと思えます。

◆戦略企画部長

本日は限られた時間の中、貴重なご意見をいただきまして誠にありがとうございました。次回、第4回の総合教育会議は今月中に開催する予定をしています。どうぞよろしく申し上げます。これをもちまして、第3回三重県総合教育会議を閉会します。

以上